

## パイデイア（そのV）

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

G・ハイエット  
村島義彦 訳

### スパルタにみるポリス教育

#### 新しい文化様式…ポリスとその類型

ギリシア文化が、その古典的形態を最初に整えたのは、ポリス（都市国家）においてであった。もともと、この新しい社会様式は、これまでの古い貴族社会や田園の農民生活に、完全に取って代わったわけではない。当然ながら、封建秩序や農村秩序は数多く生き残って、初期のポリスの内にその顔を覗かせていたし、いくばくかは、ポリスが発展を遂げた後期段階にまで存続したからである。そうはいつても、ギリシアの精神的主導権は、今や、都市の文化の手にしっかりと引き継がれていた。たとえこの文化が、いくぶんは——あるいは全面的に——古い貴族制度や農村制度の上に築かれていたにしても、ポリスこそは、新しい社会理想にほかならなかった。ポリスは、いかなる他の社会よりいっそう強固で、いっそう完全な共同体であって、そこには、ギリシアの理想がいっそう豊かに表明されていた。ヨーロッパの言語は、ほぼすべて「ポリティックス（政治）」や「ポリシー（政策）」などの単語を含んでいるが、これら

は実に、「ポリス」から派生したのである。そのような単語がたつぷりと思ひ出させてくれるのは、ギリシアのポリスこそ、「国家」と呼ばれてよいものの最初の実例である点にちがいない。このために「ポリス」という語は、用いられる文脈に応じて、あるいは「国家」、あるいは「都市」、あるいは折衷的に「都市国家」などと訳されなくてはならない。封建時代の終わりから、アレキサンダーの手でマケドニアの世界帝国が樹立されるまでの間、ポリスは、現実には「国家」と同じ広がりを見せていた。なるほど古典時代でさえ、国家の中には、いっそう広く領土を拡張したのも無いではなかったが、これらはしかし、いくぶんは独立を維持した都市国家の単なる集合体にすぎなかった。ポリスこそ、古典期——民族的発展のもっとも重要な段階——におけるギリシア史の中心であって、それゆえ、歴史的関心が寄せられてよい「的」といえるだろう。

もしもお定まりの区分を受け入れて、ギリシア人の営んだ知的・精神的生活を「ポリティックス（ポリスに関わる事柄…政治）」から切り離し、後者の方は職業的な法律家や歴史家の手に委ねて、あくまでも前者のみをそれ自体として研究しようとするなら、とうてい、ギリシア史など理解できようはずもないのがよく分かるのではないだろうか。ドイツの文

化史はなるほど、ある時期には、長年にわたって「政治」になど言及しなくとも纏めることができたけれども、それは、ドイツの政治生活が、ほんの最近になってはじめて、文化の上に抜本的な影響を及ぼすにいたったからにはかならない。ドイツの学者たちは、長きにわたって、主として美的な観点からギリシア人とその文化を研究してきたのだが、それも、こうした点にその源を発している。けれどもこれは、とんでもない力点の歪曲であって、ギリシア生活の重点は、あくまでもポリスにあったのである。ポリスは、あまねく社会的・知的活動を内に含んで、これを規定していた。初期のギリシア史では、知的生活の枝はすべからず、「共同体の生活」という同一の根からまっすぐに生い育っていた。あるいは、用いる比喻を変えるなら、あまねく知的活動は、ただ一つの中央の海——つまりは「都市の生活」——に流れ込むあまたの小川であり大河であって、この海は、しかも逆に、見えざる地下運河を介してこれらの河川すべての根元を育んでいた。こうしたわけで、ギリシアのポリスを叙述するのは、ギリシア生活の全体を叙述するのに等しい。とはいえ、そのような叙述は、実際には——少なくとも、歴史的事実の数々を「細々と時間順に語る」といった通常の方法によつては——実現しがたい単なる理想でしかないだろうが、それでもしかし、ギリシア生活のそうした本質の一体性をしっかりと認識できたなら、どの分野の研究であつても、大きな恩恵に浴するのではないだろうか。ポリスは、ギリシアの文化史全体を一括する社会的な枠組みにほかならず、われわれは、この枠組みの中に、アテナイの黄金時代の終わりにまで及ぶ、さまざま「文学」の業績の数々を配備できるのである。

そうはいつても、多方面にわたるギリシアのポリス生活をことごとく研究などできないし、この十九世紀に政治史家たちの手で収集され研究されてきたあまたの組織・制度をことごとく吟味もできない。われわれ

の探究はしかも、取り上げる物証（＝歴史的証拠）の性格上、おのずと狭く限定されないわけにはいかない。そうした物証はなるほど、個々の国家の組織・制度に関する重要細目を数多く含んでいたのだが、そこから、社会生活の生きた姿はほとんど伺えなかつたからである。ポリスの精神を決定的に表明していたのは、何よりもまず韻文であり、次いで散文であつて、これらを介して当の精神は、みずからの奉じる理想の数々を、ギリシアの精神生活に刻み入れた——この事実には、だれも文句は差し挟めないだろう。こうしたわけで、歴史的証拠も文学的証拠も、ともに手を携えて、ギリシアを代表する主要な二つのポリスにわれわれの注意を振り向けてくれるのである。プラトン自身は『法律』において、初期ギリシアの政治思想が掲げる主要な理想を見出し、これを何とか記録しようと試みたが、その際に援用されたのは、ほかでもない詩人たちであつた。この詩人たちを通してかれが見出したもの、それは、国家には二つの基本タイプがあつて、ギリシアのあまねく政治文化も、その内にことごとく含み込まれるという点にほかならない。ここにいう「二つのタイプ」とは、イオニアに源を発する法治国家と、スパルタに代表される軍事国家を描いてない。われわれはだから、そのような二つのタイプを個々別々に吟味してみることしよう。

これらの国家は、それぞれに、あくまでも正反対の精神的理想を代表していた。双方の敵対は、ギリシアの政治史を振り返るなら、文句のない基本事実にはちがいない。それどころか、ギリシアの精神史を振り返つても、やはり文句のない基本事実なのである。われわれがもし、ギリシアの政治理想は一律でない点を理解しないとすれば、激しい内的葛藤をくり返して、ついには、調和が勝ちを収めて和解にいたるギリシア文化の本質など、とうてい十分に把握できないにちがいない。ホメロスとヘシオドスの手で描かれた、イオニアの貴族社会とポイオティアの農村社

会を先に研究した際には、民族的特性などを論じる必要はさらさらなかった。それというのも、これらの社会を、同時代の他の種族と比較する手段がまるで無かったからである。叙事詩に用いられる言語は、さまざまな方言を混ぜ合わせて出来上がっており、ここから見えてくるのは、異なった多くの種族が、それぞれに汗を流して、その言語、その韻律、その英雄譚的素材をせつせと磨き上げて生み出した芸術的所産、それがホメロスの叙事詩にほかならない点ではないだろうか。そうはいっても、『イリアス』と『オデュッセイア』をいくら逆上つても、これらを生み出した種族間の精神的な差まで目にするのは無理というもので、それは、世の学者たちが、現にある叙事詩を手掛かりに完全なアイオリス調の詩を復元できないのと、あくまでも軌を一にしている。これに対して、ドーリア型とイオニア型に認められる政治的・精神的な差は、まことにくつきりと、それぞれのポリスの中に刻印されていた。二つの型は、前五世紀と前四世紀のアテナイにおいて最終的には合体したのだが、それは、ほかでもない、アテナイの政治生活はこの期間、イオニア様式で型どられていたとはいえず、スパルタ的な理想はしかし、アッティカ哲学の貴族的影響力を介して知性の領域で再生され、やがてはプラトンの文化理想の中で、イオニア的・アッティカ的な法治国家——みずからの民主的様式をはぎ取られた——の基本教義といっそう高い次元で合体したからであった。

### スパルタの歴史的伝統とその哲学的理想化

哲学史と芸術史の双方において、スパルタは、かなりの劣位に置かれている。たとえば、イオニアの種族なら、哲学的・倫理的な真理探究の面で大きくギリシアを導いたけれども、スパルタ人の名前となると、ギ

リシアの道徳家や哲学者たちの名を記した長い巻物の中に、いずこにも目にされなかったからである。そうはいってもスパルタは、こと教育史に関しては、ゆるぎのない地位を占めていた。この国のもっとも際立った業績は、みずからの「国家」であって、それは、もっとも大きな意味で「教育力」と呼ばれてよい最初のものにちがいない。

不幸なことに、この注目すべき組織を知るために依拠されてよい証拠資料は、かなり部分的で、むしろ曖昧でさえある。それでも幸運なことに、スパルタ教育のあまねく細目に例示された中心の理想は、ティルタイオスの手になると告げられた詩にはつきりと提示されていた。この理想が、もしもこれほどの迫力で語られていなかったら、とうてい、みずからにまとい付いた局地的・時代的な制約を振りほどいて、これほども深くかつ永続的に、その影響力を後代にまで及ぼせなかったにちがいない。とはいえず、ティルタイオスの哀調詩（エレジー）は、そもその理想を単に述べ挙げたにすぎず、ホメロスやヘシオドスの叙事詩とは大きく異なつて、そこからは、この詩に靈感を与えている理想の何であるかを除けば、他の何ものも学び取ることはできない。そうした詩を用いて、当の理想の歴史的背景を復元するなど思いもよらないのである。あえて復元を心掛けるなら、どうしても、のちの時代の資料に寄り掛からないではいられないだろう。

その場合の主たる情報源は、クセノポンの『スパルタ人の国家』ではないだろうか。この作品は、前四世紀の政治的・哲学的なロマン主義の所産であつて、そこではスパルタの国家が、一種の政治的天啓として捉えられていた。アリストテレスの『スパルタ人の国制』は、失われて久しいのだが、のちの時代の辞書編集者たち——この作品の章句をふんだんに用いた——の引用箇所を手掛かりに、部分的になら、どうにか復元できないわけでもない。この作品の目ざすところは、しかしながら明ら



かに、アリストテレスの『政治学』第二巻におけるスパルタ批判と同じく、スパルタを辛辣に批判して、当時の哲学者たちの徹底したスパルタ礼賛に水を差し、しかるべきバランスを回復する点にあったのである。クセノポンの場合は、スパルタに住んだ経験もあって、少なくとも、この国自体をよく知っていたのだが、リュクルゴスの伝記作家であるプルタルコスも、それに対して、同じくロマン主義者でありながら、信憑性を異にしたさまざまな古い資料を駆使する単なる文献史家にすぎなかった。そうしたクセノポンとプルタルゴスの資料価値を査定するにあたって忘れてならないのは、双方ともに、前四世紀に流行した新文化に意識的あるいは無意識的に反発して、これを糧にその活動をくり広げていた点であるだろう。かれらは、「美しい野蛮人」とも評すべきスパルタの古来の体制を大いに賞賛したが、それは、この体制が、当時の悪徳の数々を見事に克服し、さまざまな問題も同じく解決して、ゆえに「賢者リュクルゴス」は、それらを実際に目にする必要もなかった、などと——時代錯誤的に——信じていたからにほかならない。スパルタの体制が、クセノポンやアゲシラオスの生きた時代、どれほどに古臭いものであったかは、まるきり確定できない。まことに古色蒼然としていた点を保証する唯一のものは、驚くほどの保守性に彩られていた、という世の評判であるだろう。そのような強い思い込みに導かれて、この国は、あまねく貴族主義者には「理想の星」として、逆に、あまねく民主主義者には「憎悪の」として位置づけられたのであった。もともと、そのスパルタですら、時には変化に晒されたわけで、比較的のちの時代にも、その教育組織に数々の刷新を跡付けることはできるだろう。

スパルタの教育が、軍事訓練の入念な場以外の何ものでもなかったという信仰は、その源を、アリストテレスの『政治学』とプラトンの『法律』——リュクルゴスの国制が依拠した「精神」を記述した——に仰い

ていた。この信仰を正しく査定しようとすれば、それを生み出した時代状況も考えに入れられないわけにはいかない。スパルタは、ペロポネソス戦争に勝利してのち、ギリシアの指導者として文句なく君臨していたが、その覇権も、三十年後には、レウクトラの敗北をへてもろくも潰え去った。ギリシア人たちは、何世紀にもわたって、スパルタの「エウノミア（秩序正しさ）」を褒め称えてきたが、そうした声も、今やはげしく揺さぶられることになった。スパルタは、あくなき権力欲に支配されて、みずからの古い紀律に靈感を与えていた理想の数々を手放したから、ギリシア人の誰もが、この国の圧政を忌み嫌うようになった。貨幣など、かつてのスパルタはほとんど知らなかったが、今や、この国にたつぷりと流入し、ために古い託宣の正しさが、改めて「念頭にのぼる」ことになった。スパルタを滅ぼすのは「貪欲」を措いてないだろう——託宣は、こう警告していたからである。リュサンドロスの手になる巧妙な拡大政策によって、独裁的なスパルタ派遣の統治者（ハーモステス）が、ギリシアのほぼ全都市のアクロポリスを占拠し、「自律国家」のあまねく政治的自由もことごとく奪い去られた時点で、古えのスパルタの紀律は、マキアベリ型の征服者の権力を推し進める当の「源」であった点を明かしたのだった。

初期のスパルタについては、その精神を理解する上で必要とされる事柄があまりにも少ない。現代の人びとは、古典期のスパルタの国制——いわゆる「リュクルゴス」の秩序——が、比較的のちの世代の手で樹ち立てられた、という点を実証しようとせよと骨折っているけれども、これなど、単なる「仮説」以外の何ものでもない。英才の誉れの高いK・O・ミューラーは、ギリシア民族とその都市を研究した最初の歴史家であって、ドーリアの人びとにみる道徳的気高さを愛するあまり、アテナイへの伝統的賛美に対抗して、スパルタの偉大さを積極的に擁護する側

に回ったのだが、当人の主張によると、スパルタの軍国主義は、ドーリア史のはるか昔の「生き残り」にほかならない。これは、おそらく間違っていないだろう。かれの信じたところでは、スパルタの国制は、民族の大移住がくり返され、ようやくラコニアの地に定住できたという、はるか初期の固有の状況から生み出され、その後、数世紀にわたって変わることなく存続した。ドーリアの大移住は、あくまでも「伝承」としてギリシア人の記憶から消えなかった。この大移住は、バルカン半島の北方からの数ある人口移動の最後を飾るもので、中央ヨーロッパに生を受けたであろう人びとが、この半島をへてギリシアに入り、異なった種族——旧来の地中海的血統——と交わって歴史上のギリシア人を誕生させたのだが、そうした侵入者の生来のタイプは、スパルタに、わけても純粹な形で残ることになった。プロンドの髪をなびかせた戦士——これこそ、誇るべき子孫のしるしであって、ドーリアの種族は、そうした理想をピンドロスの手授けた。この詩人は、それを用いてホメロスに登場するメネラオスばかりでなく、ギリシア最大の英雄であるアキレウスをも、さらには、あまねく「プロンドの髪をなびかせた英雄時代のダナオスの息子たち」までも記述したのであった。

スパルタについての第一の事実は、何はともあれ、正規の市民であるスパルタイアータイ自身が、ほんの少数の支配階級であって、その成立も、人口の大半を占める一般民衆より後であった点にちがいない。これらに並んで、農耕に従事する自由民のペリオイコイト、征服されて奴隷の身に甘んじるヘイロタイもいて、後者は、法的な権利を実質的には何ひとつ持たない農奴であった。スパルタ人を記述した古い記録によると、かれら（＝スパルタイアータイ）は、ふだんは軍営で生活していたらしい。もつとも、このような生活スタイルは、飽くことのない征服欲に抛るよりは、むしろ、この共同体に特有の人口構成に原因したと考えら

れてよい。ヘラクレスの種族である二人の王は、歴史時代に入ると、いかなる政治権力も実質的には持たず、ただ、時おりの戦役に際して、本来の重要性を回復したにすぎなかった。二人の王を頂くという制度は、ドーリア人が大移住をくり広げた往時の「戦士君主」という制度の名残りであって、おそらくは、みずからの指導者をそれぞれに頂いた、二つの異なる侵入者群の力の拮抗から生まれたにちがいない。スパルタ人の集会は、端的にいつて、古えの軍隊のそれをモデルに仰いでいて、そこでは、およそ論争もなく、人びとは、長老会から提示された案に「イエス」か「ノー」を叫ぶのみであった。のちにそれは、みずからの権利を拡大し、提示された案に修正も加えたのだが、長老会には、そうした修正に賛同できないなら、集会そのものを解散したり、あるいは、みずからの案を撤回する権限が与えられていた。国全体を見渡して最も力のあるエフォロイ（執政官）は、王たちの政治特権を一時停止した上で、一般民衆と指導者たちの双方に、どのように権力を分散したらよいかという矛盾的難問を解決するべく、まずは双方に最小限の特権を付与し、国制の伝統である権威的性格をしっかりと維持したのであった。こうしたエフォロイが、リユクルゴスの立法に基づく——いささか文句もあるが——組織の一部である点は、十分に意義深いのではないだろうか。

ところで、ギリシア人たちが「リユクルゴスの立法」と呼ぶものは、通常の意味での「立法」とまるで趣を異にしていた。それは、さまざまな市民規則や制度規則を成文化したものとより、言葉の本来の意味における「ノモス」であって、つまるところ、当時の口承的な伝統以外の何ものでもない。おごそかに言いふらされ、文字に書き留められたのは、ほんのわずかな基本規則のみで、それらは「レートライ」と呼ばれた。プルタルコスの手で記録された「民会」の性格を規定した規則などは、これに含まれるだろうか。このような事実、前四世紀の民主制

社会を悩ませた。立法の悪習（カコエートス）と著しい対比をなし、当時の観察者の目には、はるか昔の実践活動の生き残りとしてよりは、先見の明にあふれたリクルゴスの知恵の具体例として映ったにちがいない。リクルゴス当人は、ソクラテスやプラトンと同じく、教育の力に訴えて共同体感覚を育て上げる営みに比べると、書かれた法典など、ほとんど活きた力を具えていない、と信じて疑わなかったからである。これは、ある意味において、正しいといえる。法律がその主張を強めるにつれ、口承的な伝統と教育は、有無をいわさぬ強制力で人生のあらゆる細目を規制する力を徐々に弱めていったからである。ともあれ、リクルゴスが、スパルタの教師に祭り上げられたのは、のちの哲学者たちが、当時の文化理論に基づいてスパルタ生活を解釈し、これを大々的に理想化したからにはかならない。

そのような曲解が生じたのは、かれらが、のちのアッテイカ民主制の悲しむべき衰退をスパルタと対比し、スパルタの体制は、立法的天才の手で慎重に創り上げられたものであると信じたからであった。スパルタ人の下で目にされた昔風の共同生活——兵営で戦士のように生活し、共同の会食机に集うといった——、私生活より公的生活を優先する姿勢、男女双方の若者に分け隔てなく施された公教育、産業や農業に従事する「下層民（カナイレ）」と自由を謳歌する支配層（スパルタイアタイ）の厳しい区分——後者は、実際の仕事に手を染めず、ひたすら狩りと軍事訓練と公的義務に邁進した——、こうした体制全体は、たとえばプラトンが『国家』で提示したような、哲学者の教育理想を思慮ある形で実現した『所産』であるかのようには思われた。実のところ、プラトンの掲げた理想は、パイデヤをめぐる他の理論と同じく、大きくは、スパルタという手本をその下敷きにしていた。もともと、そうした理想を貫く精神の方は、完全に新しいものであったけれども、どのようにすれば

個人主義を抑えられ、あらゆる市民の性格を共同の型にまで築き上げることができるか——この具体的方法を確立するのが、のちのギリシアの教育家たちにあまねく腐心された社会問題にはかならない。スパルタの国家は、みずからの厳しい権威主義を介して、この問題の解決を實際次元で図っていたように思われる。スパルタ自体が、プラトンの心を生涯にわたって占拠したのは、こうした事情に拠るのである。プルタルコスもまた、プラトンの教育理想の忠実な信奉者として、くり返し、そのようなスパルタ信仰に言及していた。すなわち、みずからの『リクルゴスの生涯』でこう記しているのである、「スパルタの教育は、成人男性と成人女性の双方に及んだ。誰であれ、望むがままに生きる自由はなく、あたかも兵舎内のように、その生活様式と公的義務はしっかりと固定されていた。誰もが、みずからは自らのものでなく、祖国のものであると考えていた」と。これとは別の箇所にも、こう語られていた、「概してリクルゴスは、市民たちをよく教育して、私生活を送る意思もその能力も持たないで、ひたすら蜂のように、みずからの共同体の有機的部分として常にあり、指導者を囲んで共にその袖にすがりながら、激しい熱狂と無私の想いに駆られつつ、祖国のものになり切るように仕向けたのだ」と。

ペリクレス以後のアテナイ市民は、徹底した個人主義の信念に邪魔されて、ここにみるようなスパルタを、実際上はほとんど理解できなかった。だから、スパルタの組織についてアッテイカの哲学者たちが与えた哲学的解釈の方は、なるほど無視しても構わないのだが、ただ、かれらが記録した事実のみは、しっかりと受け容れないわけにはいかない。プラトンにしてもクセノポンにしても、スパルタの国制が、ただ一人の教育的天才——それも、独裁者の権威と哲学者の先見を見事に兼ね備えた——の手で創り上げられた、と信じて疑わなかった。実際にはしかし、こ



の国制は、いっそう初期の、いっそう素朴な段階の社会生活が生き残ったものにすぎず、そうした段階を特徴づける、種族的・公的な結束の強さと個人的な率先の薄さがしつかりと刻み込まれていた。スパルタの体制は、何世紀にも及ぶ時間の所産といえるだろう。この体制を確立する上で、特定の個人がどうした役割を果たしたかについては、わずかなら、ここかしこに見定めることもできた。たとえば、テオポンポスとポリュドロスという王の名が、ある種の体制改革の推進者として挙げられているからである。リュクルゴスという人物がはつきりと実在したのは、現実に疑えないにしても、そのかれが、よく似た改革の推進者として元々から知られていたのかどうか、あるいはまた、体制全体の創設者である後に信じられたのはどうしてか、等々については、今でも明白な答えが与えられていない。われわれが口にできるのは、時代を溯っていくと、「リュクルゴスの立法」という伝承の出所がよく分からなくなる点なのである。

こうした伝承を創り上げたのは、ほかでもない、スパルタの体制が、ある教育意図に奉仕する目的で入念に創り上げられたと考える、しかも、この国が最高の意味ある目的に掲げたのが「パイディア」——つまりは、絶対の規範に合致し、それに沿って個々の市民生活が形造られていくプロセス——なのだと言わなく信じる、当の時代そのものであった。くり返し耳にされるように、デルポイの託宣は、「リュクルゴスの立法」を良いと認定し、結果として、一つの絶対的なものが世に供給され、万人が自己にとっての法となる（万物の尺度は人間）<sup>①</sup> という信念を奉じる、民主制の相対的見解が相殺されるにいたった。では次に、スパルタの観察者たちが、この国の体制を理想的な教育組織だと記述している別の具体例を紹介してみよう。前四世紀のギリシア人は、教育の問題が、人間活動を査定する絶対基準を見つけ出そうとする問題とその軌を一にしている

パイディア（そのV）

と信じていた。スパルタではしかし、後者の問題はもはや解決済みといえた。スパルタの国制は、デルポイの神自身の口から良いと認定され、褒め上げられてもいたように、宗教的真理の上に構築されていたからである。すなわち、リュクルゴスの立法という伝承全体は、のちの政治理論・教育理論と織り合わせるべく樹ち立てられていて、とうてい「歴史」などと呼べないのは明らかだろう。そのような伝承全体を正しく理解したいのなら、これ自体が生まれ育った時期をしっかりと記憶に留めておかなくてはならない。それは、パイディアの本質と諸原理をめぐるギリシアの思索がその絶頂に達して、教育の理論家たちが、スパルタの事例に燃えるような関心を注いだ時期にほかならなかったからである。この伝承が生き残ったのは（しかも、ティルタイオスの詩に保存されたのは）、ギリシアにおけるパイディアのその後の発展に、スパルタの理想が、無視できない影響力を有したからにちがいない。

ところで今、哲学的な脚色をさっぱりと拭い去ったとして、それでも残されるスパルタ像の輪郭は、果たしてどうしたものだろうか。

クセノポンは、みずから理想の国と仰ぐスパルタを記述しているが、それは、自身の理論や解釈でしっかりと上塗りされていた。そこにはしかし、個人的に観察した事実もたつぷりと報告されていたから、当時のスパルタの活き活きた像——軍事教育の独特な体系を携えた——がそれなりに復元されるにちがいない。もつとも、ここにいる教育の体系は、リュクルゴスのすぐれた脳髓から十分に武装された形で生み出された、という例の信仰を捨て去ったなら、いつ頃に築き上げられたかは、ついに決定できないままとなる。リュクルゴスの実在性については、現代の学者たちも、それなりの疑問を投げかけているが、思い切って今、当の本人はあくまでも実在の人物で、前七世紀にティルタイオスも知っていた偉

大な「成文法（レイトラ）」の著者にほかならない、と仮定したにしても、クセノポンの手で記述された教育体系の起源は、依然として深い闇に覆われている。スパルタの市民はすべからず、徹底した軍事訓練に服して、それゆえ、一種の貴族制が保持されていた。この体制には、ほかに、初期ギリシアの貴族制やそこでの訓練を思い出させる項目も含まれていて、スパルタは、元々は貴族階級の手で支配されていた、と想定しないわけにはいかないが、その教育体系は貴族以外の人びとにも押し広げられたから、貴族の地位も、いく分は改変されていたのではないだろうか。スパルタ以外の国々は、一般に、温和な貴族制を敷いていたが、これなど、スパルタに受け入れられるべくもなかった。この国は、メッセニア人たちを征服し、何世紀にも及んで、力<sup>ツ</sup>で制圧してきたのだが、そうした成功もつまるどころ、正規市民であるスパルティアータイの全員を、働いて生計を立てる必要から解き放つて、軍事的に厳しく訓練された支配階級に育て上げたからにはかならない。そのような育て上げは、いうまでもなく、前七世紀の戦争中にスタートし、当然ながら、みずからの政治的権利を拡張するべく民衆（デーモス）が引き起こした闘争——ティルタイオスも触れている——をへて、しつかりと督促されたにちがいない。スパルタ人が、みずからの市民的権利を主張できたのは、ひとえに、兵士としての役割を果たしていたからで、市民<sup>〓</sup>兵士（つまりは民兵<sup>〓</sup>）というこの理想は、ティルタイオスの手で最初に記述されてのち、スパルタの教育体制の全体にわたって具体化された。とはいえティルタイオスですら、この理想が実際に必要とされるのは、戦時中<sup>〓</sup>に限られる、と考えていたようで、その詩にはこう記されている。スパルタの体制は、わたしの時代に登場したばかりで、十分に育っていたわけではない、と。

ティルタイオスの提供する資料は、さらに、メッセニア戦争をめぐる証拠として信頼に足る唯一のものでもあった。現代の批評家たちは、

ギリシアの歴史家連中の伝える証拠を、すべからず——あるいはほとんど——想像の産物でしかないと考えて、未練もなく捨て去っていたからである。ティルタイオスの詩情は、メッセニア人たちの大反乱を介して強く掻き立てられたのだが、そのかれらを最初に征服したのは、当人より二世代前のスパルタ人たちであった。かれの告げるところによると、「十九年に及んで、かれら——われわれの父の父<sup>〓</sup>である槍兵たち——は、不屈の意志を携えながら、容赦のない姿勢で途絶えることなく戦いをくり広げた。そして、ようやく二十年目に、敵方はみずからの沃野をあとに、高くそびえるイトメの山々から敗走した」。かれはまた、国民的英雄のテオポネポスに言及して、こうも語っている、「神々に愛されたこの王を介して、われわれは、広大なメッセニアの地を占拠したのだ」と。これらの言葉は、のちの歴史家たちにも引用されているが、さらに別の断片には、征服された種族の隷属ぶりが活き活きと伝えられていた。すなわち、ティルタイオスが「実り豊かな」と記述したメッセニア人の土地は、スパルタ人の間で分割され、かつての所有者たちは「農奴<sup>〓</sup>」の身に落ちて、「あたかもロバのように重労働にあえぎながら、土地が生み出す全産物の半分を、仕える主人たちに差し出すという辛い境遇に甘んじなくてはならなかった。・・・そして、主人たちの一人が没したなら、みずからもその妻も、こぞつて葬儀に参列し、哀悼の涙を流さなくてはならなかった」。

メッセニア人の反乱に先立った状況をこのように記述して、ティルタイオスは、そもそも何を意図していたのだろうか。ほかでもない、かつての勝利を思い出させてスパルタ軍を鼓舞したかったのと、もしも敗れたなら、待ち受ける運命がいかに悲惨なものかを活写して、スパルタ軍を脅したかったからである。今に残っている完全な詩は数も少ないが、その一つは、次のような言葉で始まっていた、「お前たちは、不屈の英雄



ヘラクレスの血を引いている——ゆえに元気を振り絞るのだ！大神ゼウスは、はげしく怒りながらも、いまだその頭を背けてはいない。あまたの敵を恐れるな、かれらの手から逃れようとするな！……お前たちは、軍神アレスの手になる痛ましい戦いの「破局」を知っているし、耐えがたい戦争の精神も十分に実感していたはずだ。敗走にせよ追撃にせよ、ともにしっかりと体験していたのだから」と。これ自体は、敗れて士気をくじかれた軍に対する励ましの呼びかけにほかならない。伝承もまた、そうしたティルタイオスを、危機に瀕したスパルタ人たちを救うべく、デルポイのアポロン神がお遣わしになった指導者なのだとしていた。のちの歴史家たちは、ティルタイオスこそ実際の総帥であったと口にしていて、この言は、現代の学者たちにも信用されていたが、新たに発見されたパピルスに、ティルタイオスの詩の長い断片で、これまでに知られていなかったものが目にされるに及んで、それなりの訂正を余儀なくされた。この詩の中で、かれは、一人称複数——要するに「われわれ」——の形で語りながら、スパルタ人たちに向けて、われわれの指導者に従おうではないかと呼びかけていたからである。これは、将来の姿を映したもので、勃発寸前の大事な戦闘を、ホメロスの作法に則って記述したものにほかならない。そこに言及されていたのは、旧来のスパルタの三種族——ヒュレイス、デイマネス、パンピュロイ——であって、これらは、当時の軍の編成単位と明らかに軌を一にしたが、のちには、新たに編成し直されることになった。これに加えて、城壁と塹壕をめぐる戦いの様子も語られていて、それによると、どうやら包囲が進行中であつたように見受けられる。ざっと以上を別にすれば、ティルタイオスから得られる歴史的資料はなく、古代の人びとでさえ、その詩の中に、われわれが手にする以上の具体的事実など見い出せなかつたのである。

### アレテー（徳）に呼び掛けるティルタイオス

スパルタを大国にまで導いた意思そのものは、なおも、ティルタイオスの哀調詩（エレジー）に生きていた。この意思には、偉大な理想を創り出す力が具わっていて、その力は、歴史的なスパルタに長く生き残り、いまだ消尽していなかったのだが、これを最も強く表示したのが、ティルタイオスの詩にほかならない。スパルタの社会は、のちの歴史も知っているように、多くの点で、きわめて一時的な常軌を逸した代物であつた。けれども、その市民たちをしっかりと鼓舞し、あまねくスパルタ人のあまねく努力が、鉄のような一貫性をもって、ひたすらそれに向けて来た当の理想は、あくまでも消滅を越え出していた。そこには、もつとも深い人間本能が表出されていたからである。そのような理想を組み入れた社会の方は、われわれの見たところ、まことに部分的で、その前途も限られていると思われたけれども、理想の方はしかし、本当に価値あるものに留まっていた。市民の職分とその教育をめぐるスパルタの発想には、プラトンも、まことに狭量な<sup>レ</sup>と判定しないわけにはいかなかつたが、ティルタイオスの詩を介して不滅化されたスパルタの理想については、政治生活を支える不動の根底の一つであると、しっかりと見抜いて誤らなかつた。それはしかし、単にかれのみでなく、プラトンは、ギリシアにおける一般的なスパルタ観を素直に表明したにすぎない。かれの時代のギリシア人たちは、スパルタとその政策を無条件で是認したわけではなかつたが、この国が掲げる理想の価値のみは、誰しも、しっかりと肯定して憚らなかつた。いかなる都市にも、リュクルゴスの立法を美化して崇める「親ラコニア派」はいたけれども、市民の大半は、そのような無条件の賛美を共有しなかつた。それでも、プラトンの手で文化体系の中に割り当てられたティルタイオスの位置は、あまねく後代のギリシ

ア人の目に「妥当」と映って、かれらの文化を彩る要素として不可欠なものとなった。プラトンこそ、国民の受け継いだ精神的遺産を整理し体系化した当の本人にほかならない。かれの試みた総合化のなかで、ギリシアに靈感を吹き込んでいた理想が客体化され、相互に正しく位置づけられたからである。このとき以後、プラトンの体系に大きな変化はみられず、スパルタの理想は、文化史の中で、プラトンに割り当てられた「位置」を二千年にわたって連綿と保ち続けた。

ティルタイオスの哀調詩に靈感を吹き込んでいるのは、一つの強力な教育理想にほかならない。この詩は、スパルタ人の自己犠牲と愛国心をめぐって、さまざまな要求を課しているが、そうした要求も、当の詩がまとめられた状況を考えると「妥当」といえるのではないだろうか。というのもスパルタは、メッセニア戦争の重荷にあえいで、ほとんど沈没しかけていたからである。とはいえ、もしもこの詩がああ理想を、時代を超えて永遠に訴えたものでなかったなら、のちの時代もこれを称えて、ここにこそ「自国のことでは我を忘れて夢中になる」というスパルタの意志が最高度に表明されている、などと口走らなかつたにちがいない。この詩が、あまねく市民の思索と活動に課す基準の数々は、好戦的な愛国心が一時的に噴出して生み出されたものでなく、まさに、スパルタの秩序(コスモス)全体を支える基盤そのものであった。詩人の創作活動は、当人が属する社会の實際生活にいかん端を發しているか——この点を、数あるギリシアの詩のなかで、ティルタイオスの詩以上に明白に告げているものなど果たして在るのだろうか。ティルタイオスは、現代的な意味での「個人タイプ」の詩的天才などではない。かれは、人びとの声を代弁し、代弁されているのは、まっとうな市民すべての信条であった。ゆえにかれは、しばしば、一人称複数の形で語りかけて、あるいは「戦おうではないか!」と叫び、さらには「死のうではないか!」とも叫ぶ

のである。かれが、一人称単数の「わたし」を用いる時ですら、そこで「わたし」は、みずからの個性の勝手な発露体でもなければ、かといって、古代の人びとが考えたような——かれらは、ティルタイオスを「総帥」と呼んでもいた——卓越した権威体でもない。それはまさに、普遍的な「わたし」であって、あのデモステネスが「その国の一般的な声」と呼んだものにほかならない。

ティルタイオス自身は、あくまでも祖国の声を代弁していて、それゆえ、何が「誇らしく」て何が「恥ずべき」かをめぐる当人の判定は、並みの演説家の主観的見解に比べて、はるかに大きな比重と権威を具えていた。国家と個人の緊密な結びつきなど、平時には、たとえスパルタであつても並みの市民にはかなり荷が重かつたであろうが、いざ危急の折になると、この理想は、圧倒的な力を携えてすぐさまその姿を現わした。長くて先行きの怪しい戦争は、当時は開始されたばかりで、さまざまな脅威をもたらし、スパルタの「鉄の枠組み」は、それを介してしっかりと鍛えられていった。そうした暗い時間の中でこの国が必要としたもの、それは、政治的な意味でも軍事的な意味でも断々固とした統率と導きであり、さらには、白熱する戦争の中で点火された新しい徳を、普遍妥当な形で表わし出す営為であつた。ギリシアの詩人たちは、何世紀にもわたつて「徳(アレテ)の布告者」を務めてきたけれども、そうした布告者が、今や、ティルタイオスという名で世に登場した。すでに観察しておいたように、この詩人を遣わしたのはアポロンの神である、と伝えられていた。ここには、精神的な指導者が必要とされる際に当の本人は間違ひなくやつてくる、という奇妙な真理が表明されていて、事実、ティルタイオスは、国家的危機に際して必要とされる新しい市民的徳を、永遠の詩のスタイルで表明するために登場したのだった。

かれの手で刷新されたのは、そのスタイルではない。当人は、大なり

小なり伝統的な様式を用いたからである。哀歌調の二行連句は、そもそもの起源が——古代の文芸批評家たちにもそうあったように——定かでないにしても、ティルタイオスの時代に先立って生まれた点のみは否定できない。この所式は、叙事詩に用いられた英雄調の韻律とも結びついて、主題に向けた媒体として当時、後者と同じく頻繁に用いられて、そこには不変の構造など認められなかった（しかるに古代の文法学者たちは、誤った語源研究とこの分野の遅れに影響されて、あまねく哀歌詩の起源を世の哀悼歌に求めようとしたが、これなど、誤り以外の何ものでもない）。哀歌詩における不変の要素として、たとえば、その韻律を挙げてもよいだろうが、これとて、最初期には固有の名を付して英雄調の韻律から区分されることはなく、ゆえに、これを除いて他に該当するのは、あくまでも一つ、哀歌詩はつねに「誰かに語りかける」という点であるだろう。この詩は、特定の個人にせよ、あるいは人びとの集団にせよ、誰かに語りかけて止まないものである。だからそれは、話者と聴衆の「見えない絆」を表明し、この絆こそ、あまねく哀歌詩に固有の特性にはかならない。たとえば、ティルタイオスが語りかける相手は、ある場合にはスパルタの市民であり、ある場合にはスパルタの若者であった。いつそう瞑想的な調子ではじまる詩句（断片九）ですら、最後には「勸告」へと絞られていて、いつもと同じく、仮定されるだけで明確に表示されない組織のメンバーへの語りかけとなっていた。このような勸告調の語りかけは、哀歌詩の教育的性格を何よりも表明しているのではないだろうか。そうした性格は、もちろん叙事詩にも共有されていたが、哀歌詩の語りかけは——ヘシオドスの教訓詩と同じく——叙事詩に比べてもっと直接で、もっと慎重で、もっと目的明示的であった。叙事詩は、数々の神話的実例を用いて空想世界の中に位置を占めたのに対して、哀歌詩は、具体的な人びとに語りかけたから、われわれを導いて、当の詩人に靈感を吹き込んだ

実際状況もしつかり紹介してくれたのだった。

ティルタイオスの哀歌詩は、内容の上で聴衆の實際生活を扱っていたけれども、様式の方は、ホメロスの叙事詩のスタイルにしつかりと縛られていた。詩人は、当世風の主題に、ホメロスの古式言語という衣装をまとわせたのだった。ホメロスのスタイルなら、ヘシオドスも、やはり用いないではいられなかったが、これ自体は、ティルタイオスにいつそう相応しいものであった。叙事詩にわけても親しいのは、過酷な戦闘や英雄的武勇を描いてなかったからである。ゆえにティルタイオスは、ホメロスの言語様式、個々の単語、さまざま言い回し、各行の断片類などの多くを借り受けたばかりでなく、さらに『イリアス』の戦闘場面——指揮官が、危機に際して部下たちに語りかけ、これを励まして高い勇気と断固たる抵抗を導き出すような——にならって、みずからの詩のいくばくかを創り上げる点も学んだのだった。これらの激励を叙事詩の神話的背景から切り離し、活きた現在に移し替える——かれが為したのは、これを描いてない。叙事詩でも、戦闘の危機的局面でなされる演説は、強力な「励まし」の効果を具えて、それはしかも、他の登場人物によりは、ホメロスの聴衆に語りかけられていたように思われる。スパルタの人びとは、こうした効果の絶大性をしつかりと実感していたから、ティルタイオスも、そうした演説がもつ途方もない道徳的刺激を、ホメロスの想像上の戦いからメッセニア戦争の実際の戦闘場面に移し替えるだけで事は足り、そのようにして、みずからの哀歌詩をまとめたのだった。ホメロスを読むにあたって、われわれがもし、ティルタイオスやヘシオドスの時代と同じ姿勢でそうしたなら、すなわち、当のホメロスを「過去を語る人物」でなく、現在を教育する人物」として捉えたなら、ここの精神的な移し替えの意味するところも、いつそう深く理解できるのではないだろうか。



テイルタイオスは、みずからがホメロスの後裔（いわゆる「ホメリタイ」）にほかならず、スパルタの国民に語りかけた哀歌詩は、『イリアス』と『オデュッセイア』を直接に継ぐものだ、と信じて疑わなかった。とはいえ、かれの作品を真の意味で「偉大」にしていたのは、ホメロスの言い回しやそのレトリックが多少とも効果的に模倣されていたからではなく、当人の精神力が卓越していたからで、この精神力に訴えて、かれは、叙事詩の意匠と素材をさまざまに変形し、みずからの時代に意味あるものとした。もしもテイルタイオスの作品から、ホメロスの借用である発想、単語、韻律的転換のすべてを取り去ったなら、あとに残された固有のものなど、おそらくは無きに等しいかもしれない。けれども、目下の線に沿ってこの人物を吟味したなら、直ちに、当人のオリジナリティーが確認されて、われわれは、かれの用いる紋切り型の道具立てやヒロイズムといった昔風の理想が、その実、かれの信奉する新しい道徳的・政治的な権威、つまりは、個々の市民のすべてを超越し、あまねく市民がそれのために生きかつ死ぬところの「都市国家（ポリス）」から、新たな生命を付与されている点に思いが至るのではないだろうか。テイルタイオスは、ホメロスが理想に掲げた「特定の勝利者のアレテー（徳）」を鑄直して、新たに「愛国者のアレテー」を創り上げたのだが、これを介して当人が求めたのは、当時の社会全体に新たな生命を吹き込むことであつた。すなわち、「英雄たちの国」を生み出すべく懸命に努めたのである。死は、それが「英雄の死」であるなら、あくまでも美しい。そして英雄の死とは、祖国のために死ぬことであつた。死にゆく人間を称揚できる唯一の発想は、これを措いてなく、当の本人は、これを介してはじめて、みずからの生命よりいっそう高次の善にその身を捧げているのだ、と実感できるのである。

テイルタイオスは、アレテーという観念をこの上なく評価したが、こ

の点は、現存する第三の詩にわけても明瞭に物語られているのではないだろうか。この詩は、純粹に文体的な根拠から、かなり最近まで「真作のリスト」から削除されてきたが、わたしは、間違いなく真作であるという証拠を、余すところなく他の箇所提示しておいた。この詩は、なるほど、いくら遅くともソフィストたちが活躍した時代——前五世紀——には位置づけにくいかもしれない。ソロンにしてもピンドロスにしても、共にこれを知っていたし、早くも前六世紀にはクセノポンが、この詩を彩る主要な発想の一つを、現存する自らの詩でしつかりと模倣し、修正まで施していたからである。それにしても何がプラトンを導いて、テイルタイオスの作とされた当時の多くの現存詩から、あえてこの哀歌詩を選び出させ、ここにこそスパルタの精神がこの上なく見事に代弁されている、とまで語らせたのだろうか。この点については、かなり明らかとすべきで、当の詩人が、スパルタ風のアレテーの本質を解き明かす際に發揮する精密さと力強さ、を措いてないはずである。

テイルタイオスの哀歌詩は、ホメロス以後のアレテー観念がどうした発展史をたどったか、また、都市国家の勃興に伴って古い貴族理想が蒙らないでは済まなかつた危機のいかにあつたか、を覗く格好の「窓」を開いてくれた。かれは、当時の人びとが、人間に真の価値と評価をもたらずと信じていた諸々の善にまさつて、「本当の」アレテーをわけても褒め称えた。すなわち、こう口にしてるのである、「たとえ当人に、キュクロプスの聳える背丈と強さがあり、トラキアのボレアスをしのぐ足の速さが具わっていても、そうした格闘の才や足の武勇のゆえに、わたしは、その人に言及したり評価したりはしないだろう」と。ここに紹介されているのは、体育的なアレテーの——いささか誇張された——具体例であつたが、そのようなアレテーは、ホメロスの時代から貴族たちの手で、いかなるものにも勝つて大々的に賞賛されてきた。それだけでは

ない、もつと前の世紀にも、このアレテーは、オリンピック競技の隆盛に支えられて、一般民衆の間でも、人間の手で樹立される頂点の業績と評価されていた。テイルタイオスは今や、古えの貴族階級に賞賛された他の徳も加えながら、高まる感情に我を忘れてこう叫んだ、「もしも当人が、容姿の上でテイトノスより美しく、富の上でミダスやキニユラスより豊かで、威容の上でタンタロスの息子ペロプスより王者然とし、弁舌の上でアドラストスより滑らかだったとしても、すなわち、戦場での勇敢を除いて、それ以外の栄光をすべて身にまとっていても、そうした栄光のゆえに、わたしは、当の本人を決して褒めないだろう。そのかれが、血なまぐさい殺戮を我慢強く正視し、面と向き合つて敵を苦境に陥れられないなら、とうてい、戦場での『よき人』となど呼べないのだから。これこそがアレテーだ！ これこそ、若者が並み居る人びとを凌いで勝ち取りうる最善かつ最良の榮譽なのだ。およそ人が、主たる戦士たちの間に座を占めて、みずからの地歩を容赦なく固めようとしたら、そして、恥ずべき逃亡を夢想する弱い心をすべからく捨て去ろうとしたら、これこそ、すべてに——都市にもあまねく人びとにも——共通した善とみなされてよい」と。このようなセリフは、「その後のレトリックの所産」などと評されてはならない。賢者ソロンも、同じ口調で語っていたし、レトリックという様式の起源も、歴史的にはるか過去まで逆上ったからである。テイルタイオスのセリフにみる興奮した繰り返しは、激しく高まった感情の結果であり、これに駆られて当人は、真のアレテーとは何なのか」という中心の問いを問いつつ続けた。それに対する凡庸な答えは、最初の「○行ないし一二行にみられる力強い否認で、順々に捨て去られた。古えの貴族たちが奉じた高貴な理想はすべて——完全に否定されたか、一新はされなかったもの——かなり格下げされ、次いで詩人は、聴衆の興奮をさらに高めたあげく、まことに辛口ともいふべき、市

民はどうあるべきか」の新しい理想を高々と宣言した。真のアレテーか否かを見定める基準は、たった一つしかない。すなわち、『ポリスにとつて共通の善であるか否か』を措いてなく、ここから、社会共同体に資するものはすべて『善』とされ、逆に、これに仇なすものはすべて『悪』とされたのだった。

ここからおのずと歩を進めて、かれは、祖国のために身を捧げた人間が、あるいは戦場に斃れようと、あるいは堂々と凱旋しようと、その手に握つてよい『報い』を褒め称えて、こう語っている、「けれども、ここに人あつて、強力な戦士たちに囲まれて倒れ——その胸も、鋌飾りの盾も、胸当ても、ともに前面に無数の傷穴を穿たれながら——なげなしの生命を失つたにしても、祖国と同胞市民と父親のために貴重な栄光を勝ち取つたなら、老いも若きも、ともに悼みの涙を流し、都市の全体が、悲嘆に暮れて当人を弔う。そして、かれの墓もその子供たちも、人びとの間でしつかりと称えられ、子供たちの子供たちも、さらには後裔のすべてが同じ榮譽に浴するのである。かれの名と輝かしい評判は、いつまでも朽ちないで、当の本人は、たとえその身を大地の下に横たえようと、かわらずに不滅であり続ける」と。ホメロスに登場する英雄の誉れは、吟遊詩人という『渡り鳥』の口からいかに広く宣伝されようと、素朴なスパルタの一戦士の誉れ——テイルタイオスの手で記述され、人びとの心に深く永遠に刻み込まれた——に比べると、あくまでも『無に等しい』と考えないわけにはいかない。都市国家の親密な集団性は、かれの詩の冒頭では、単なる『義務』として位置づけられているように見受けられたが、今や、『特権』ないし『名誉』の形で登場していた。この集団性こそ、あらゆる理想を価値づける本源にはかならない。この詩の第一部では、アレテーという英雄的理想がひたすら都市国家の観点から論じられ、第二部でも、誉れという英雄的理想が、やはり同じ述語を用いて繰り返

されていた。叙事詩では不可分の関係にあったアレテーと誉れが、今や、都市国家と深く関わって、誉れの方は、この国家の手で国家の中で与えられたし、アレテーの方も、やはり同じ仕方では鍛えられた。ポリスは、個々人が死んだ後も生き残って、それゆえ、当人の「名」を保持する安全な護り手として、英雄の「未来の生命」もしつかり護ったのだった。

初期のギリシア人たちは、いわゆる「魂の不滅」などまるで信じていなかった。人ならば、その肉体が死んだ時点で死んだのである。ホメロスが「プシユケー」の名で呼んだのは、この肉体を単に映しただけの亡霊であり、ハデス（冥界）に生きる影であり、つまりは「中身の無い虚」であった。それでも或る人が、祖国にわが身を捧げて普通の人間の生存の境界を超え、いつそう高次の生活に至ったなら、ポリスは、かれの理想的人格——つまりはその「名」——を不滅化して、当の本人も永遠化した。これは、ポリスに結び付けたヒロイズムの発想だろうが、都市国家の勃興に伴っていつしか主流を占めるようになり、ギリシア史を通して、その座をいささかも譲らなかつた。ポリスの存在としての人間は、そのために生きかつ死にもした共同体（ポリス）に永久に憶えてもらうことで、はじめて自らを完結できた。哲学者たちは、人間の義務として「名声など軽蔑すべきだ」と説諭したけれども、これなど、国家の——実際には、あまねく地上生活の——価値がひたすら疑問視され、逆に、個々人の魂の価値が称えられはじめて以後——このプロセスは、キリスト教で絶頂を迎えた——のことであつた。デモステネスやキケロの政治思想でも、こうした変化の痕跡は目にされない。ましてや、テイルタイオスの哀歌詩は、都市国家に結び付いた道徳の第一段階を代表していたので、そうした痕跡の目にされようはずもなかつた。死んだ英雄を保護して不滅化するのには、ポリスであり、勝利を手で晴れて生還した戦士を称えるのも、やはりポリスであつた。「そうした人間を、老いも若きも一緒に

なつて、誰もが祝福する。かれの生活は、豊かな幸福に包まれる。かれに無礼を働いたり、危害を加える輩などいないだろう。たとえ年老いても、かれは、市民たちの間で敬われ、どこへ出かけようと、老いも若きも、皆がともに道を譲るのである」。これは、単なるレトリックではない。初期のギリシアの都市国家は、規模の点で小さくとも、その本質に目を向けると、まことに英雄的で、まことに人間的なものを具えていた。ギリシアでは、そして実にあまねく古代世界では、人間性が最高度に輝き出た者こそ「英雄」にほかならない、と考えられていたのである。

ポリスは、この哀歌詩では、あらゆる市民の生活に靈感を吹き込むものとしてポジティブに描かれているが、同じその力は、テイルタイオスの別の哀歌詩には、市民を強要し、脅し、恐れさせる存在としても登場している。対比されているのは、戦場に果てた栄光の死と、出征して戦うという市民的義務を打ち捨て、みずからの故郷を離れざるをえなかつた人間がたどる運命ともいふべき惨めな放浪生活であつた。後者の輩は、みずからの父や母、その妻や幼な子を伴って、あてもなく世界をさまざざ歩く。飢餓と困窮に苛まれながら、かれは、途中で出会う誰にも「赤の他人」であるほかはなく、あまねく人びから敵視される。種族の顔に泥を塗り、みずからの気高い顔と姿を汚したからだ。あとに従うのは、無法者根性とさもしさのみ……。ここには、国家の振りかざす容赦のない論理——メンバーの生命と財産すら要求する——が、わけても活き活きと描かれている。テイルタイオスは、祖国の英雄に払われる誉れをありありと記述したが、さらに加えて、追放者が味わう悲惨な運命も、同じリアリズムに訴えて赤裸々に描いている。そのような連中は、脱走兵に課される緊急処置で追放されるにせよ、あるいは、軍務を逃れて自分から故郷を捨て、別のポリスで「よそ者」の生を送らざるをえないにせよ、いささかの差もない。このように補足し合う二つの具体例で、ポリ



スは、<sup>レ</sup>氣高い導きの星<sup>ク</sup>と同時に、<sup>レ</sup>有無を言わさぬ絶対権力<sup>ク</sup>としても位置づけられ、そうした意味では、限りなく神に近い存在であった。ギリシア人には、ポリスは常に<sup>レ</sup>神聖不可侵<sup>ク</sup>として実感され、市民的徳と社会の安寧も、純粹に物的・利害的に繋がっているのではなく、あくまでもポリスの賜物として思い描かれた。ポリスは、宗教的基盤を具えた<sup>レ</sup>普遍<sup>ク</sup>にはかならない。そのポリスが奉じる新たなアレテーは、英雄時代のその対極に位置し、ここから、ギリシアの宗教理想の転換もすっかり読み取れるのではないだろうか。ポリスは、人間的な事柄と神的な事柄のすべてを縮約した<sup>レ</sup>新たな神（典型）<sup>ク</sup>となったのである。

ティルタイオスは、古代にも有名であった今一つの哀歌詩、すなわち『エウノミア（良き秩序）』でも、スパルタの国制が真に興味したところをつぶさに説明していたが、これとても驚くには及ぶまい。かれは、スパルタ社会の基本原理に照らして、スパルタの人びとを教育しようとするためだからである。それと同じ社会は、古いレートラ（書物）にも別個に記述されていて——この書物はさらに、プルタルコスの手で『リュクルゴスの生涯』に生粋のドーリア方言で写し取られていた——、ティルタイオスは、それほど価値ある遺品の中身をみずからの哀歌詩に意識し、これの存在を、古代において証拠立てていた。この詩人は、いうまでもなく、時と共にいつそう<sup>レ</sup>祖国の教育者<sup>ク</sup>になっていったが、それも、当人の詩に、スパルタの世界全体が——平時と戦時を合わせて——丸ごと要約されていたからにはかならない。詩の様式に顔を覗かせた変奏の数々も、なるほど、興味ある問題を文学史や国制史に提起するとはいえず、詩の中身に比べると、ここで論じるには及ぶまい。

『エウノミア』の底に横たわる思想は、ティルタイオス自身の姿勢と、それに基本的に敵対したイオニアとアテナイの政治理想をともに照らし出してくれるのではないだろうか。イオニア人たちは、伝統や神話の権

威に拘束されているとは実感せず、ひたすら<sup>レ</sup>合法<sup>ク</sup>という權威——多少は普遍性のある社会的・法的理想に合致した——の普及に汗を流したが、ティルタイオスの方は、スパルタの<sup>レ</sup>エウノミア（良き秩序）<sup>ク</sup>を神の法令から導き出して、このように神に源を発するから、エウノミアは、その正しさを最も確かに保証されている、と考えて譲らない。「クロノスの息子で、王妃ヘラの夫である大神ゼウスが、御みずから、この都市を<sup>レ</sup>ヘラクレイダイ（ヘラクレスの息子たち）<sup>ク</sup>——われわれを伴って、風の吹きすさぶエリネオスに別れを告げ、ペロプスの広い島にたどり着いた——にお与えになった」——この断片を今、古いレートラ（書物）を再現したもつと長い箇所結びつけてみると、ドーリア移住の第一期に逆上るスパルタ国家の神話的起源説を、あえてティルタイオスが復活させた意味も十分に読み取れるのではないだろうか。

レートラには、王たちや長老会の権力に対する人民の権利がはっきりと規定されていた。これは、スパルタ国家の基本法であって、ティルタイオスは、その根拠も神的な權威に求めている。これ自体が、デルポイのアポロン神の託宣では認められていた——あるいは申し付けられていた——からである。スパルタが、メッセニア人からくも勝利してのち、一般人民は、みずからの強さを実感し、戦争に払った犠牲の報いとしてさまざまな政治的権利を要求しはじめた。ティルタイオスは、そうした要求が過度に及んだ場合に、しっかりと抑える手はずを整えていた。すなわち、この国における当人たちの財産はすべて、「ヘラクレスの種族」である王たちから預かっていたのだ、と思ひ出させたのだ。ドーリア人のペロポネソスへの移住を「ヘラクレスの種族の帰還」と記述した古い伝承に従うなら、ゼウスがこの地をお与えになったのは「ヘラクレスの種族」に対して、だったからである。王たちこそ、はるかな過去にスパルタを創設した神の営為と現在をつなぐ唯一の正当な環にはかならな

い。デルポイの託宣は、王たちの地位を永久に確定したのだった。

スパルタの世界は合法的な基盤の上に構築されている——テイルタイオスの『エウノミア』が意図しているのは、この点を典拠に基づいて証明することであった。この作品では、メッセニア戦争当時の強い王権は、いくぶんは理にかなった解説として、いくぶんは神話的な思い出として捉えられているが、テイルタイオス自身は、市民的徳を語ったその詩も示すように、保守反動の輩からほるかに遠い処にいた。かれは、貴族社会の道徳に替えて都市国家の道徳を訴え、国家内のあまねく市民を戦士の一員として受け入れるべきだと熱心に唱道したが、だからといって「革命論者」をはるかに超えてもいた——かれは、民主制に賛成票を投じていない——。その『エウノミア』も語るように、軍隊を招集するのは民会であったが、当の民会は、評議会が差し出す提案のすべてに「賛」ないし「否」は投票できたものの、自前で法案を差し出す権限は具えていなかった。このような体制は、戦争の終結後も維持するとなると、かなりの困難を伴ったにちがいない。しかるに権威者たちは、明らかに、戦争における精神的指導者としてテイルタイオスが具えていた民衆への影響力を利用して、当人の唱える「正しい秩序」を、一般民衆の高まる要求への「防波堤」として維持したのだった。

『エウノミア』の著者としてのテイルタイオスは、なるほどスパルタの住民であったけれども、戦争詩を語るテイルタイオスは、あくまでもギリシア全体の住民であった。戦争の試練に晒されつつ、どちらかというところ、非英雄的な世界の党派抗争の只中で、本当の詩を生み出す瑞々しい靈感の源として、新たな形のヒロイズムが登場した。この新しい詩は、わけても暗い危機の時間を味わうポリスそのものを歌い上げ、それによって、ホメロスの理想世界の傍らに確かな位置を手に入れたのだった。哀歌調の戦争詩をまとめたのは、単にテイルタイオスばかりでなく、エ

ペソスのカリヌスというイオニアの詩人もやはりそうで、テイルタイオスに少しばかり先立ったこの人物の詩は、様式と中身の点で、おのずと両者を対比させるにちがいない。双方が交流をもったか否かは不明ながら、たぶん、まったく交わらなかったのではないだろうか。カリヌスの詩は、共通の敵に抗戦せよと同胞市民に呼びかけたものであった。ここにいう「敵」は、別の詩の断片によると、小アジアに侵攻してリュディア王国にだれ込んだ野蠻極まるキンメリア人たちを指していたように思われる。同じ状況下で同じ特定状態に身を置くと、同じ順序の詩的体験が生み出されるものらしく、カリヌスもテイルタイオスに似て、ホメロスの所式を真似ながら、そうした叙事詩の様式に都市国家の共同生活という新感覚を混ぜ合わせたのだった。

ところで、カリヌスと同胞のエペソス人たちを動かして、一時的にもせよ共同して事に当たらせた当の精神は、スパルタの恒久的な靈感の源となり、その教育信条のすべてとなった。そして、共同生活や共通努力といった新感覚と、スパルタ史を貫いてこの国に生き続けている——と当人が説く——英雄的信念をあまねくスパルタ人の心に注ぎ込んだのは、ほかでもないテイルタイオスであった。その声は、社会共同体に身を捧げる「ヒロイズムの理想を説く教師として、まもなく、ラコニアの果てにまで響き渡った。およそギリシアの地で、市民的勇気が市民たちの手で実践され、あるいは国家の手で強要されているような処では、そしてまた、祖国のために死んだ英雄たちが敬われるような処では、テイルタイオスの詩があまねく称賛された。そこには、古典的な形で「スパルタ固有」の信条が述べられていたからだだが、その称賛は、スパルタ以外の国でも、否、アテナイのような反スパルタの国でも目にされた。かれの詩文は、前五世紀には、戦士たちの墓に刻まれた碑文を介して、また前四世紀には、斃れたアテナイの戦士たちを記念して語られた公的な

追悼演説を介して、広く世に響き渡った。そして、宴席でも笛に合わせ  
て朗誦された。アッティカの雄弁家たちは、リュクルゴスに倣ってこの  
詩文を、ソロンの詩と同じほどに深く若者たちの心に刻み込もうとしき  
りに汗を流した。プラトンも、みずからの理想国で戦士たちに与えるべ  
き位置に触れて、テイルタイオスの訓令をそのまま引用し、戦士たちは、  
オリンピック競技の勝者よりはるかに高く称えられるべきだ、と語って  
いる。晩年の『法律』にも、こう語られていた。テイルタイオスの詩は、  
前四世紀のスパルタでもやはり同じく、ドーリア国家の精神——すべて  
の市民を鍛え上げ、戦争に際して同じ勇気を發揮させる——を最高度に  
開示したものと評されていた、と。プラトンの言葉に従うなら、あまね  
くスパルタ人は、テイルタイオスの詩をしつかりと「詰め込まれて」い  
た。このわたしのように、国家の真の本性とか最高の人間の卓越性をめ  
ぐってスパルタが抱くイメージなどまるで受け入れない非スパルタ的な  
人間にとつても、テイルタイオスの伝える「福音」の多くが、なおも十  
分な説得力を具えている点は認めないわけにはいかない——プラト  
ンは、このようにも語っている。

テイルタイオス自身は、いうまでもなく、ギリシアの社会発展におけ  
る全行程中のほんの一段階を代表していたにすぎない。それでもギリシ  
ア人たちは、アレテー概念を鑄造し直すにあたって、常に、情熱がほと  
ばしり出たテイルタイオスの革命的な詩句を引用し、真の徳をテーマと  
したこの詩の古い様式にみずからの新たな信条をはめ込んだ。ここにみ  
る方式こそ、真にギリシア的な「文化」の発想にほかならない。ひとた  
び「型（パターン）」が固定されるや、この型は、いつそ後の——いつ  
そう高次の——発展段階においても、変わらずに妥当なものであり続け  
た。あまねく革新も、それゆえ、この型に合わせた自己変容の形を取ら  
ないわけにはいかない。コロポンのクセノパネスという哲学者は、だか

らこそ、テイルタイオスが没して百年も経つのに、徳をめぐる当人の詩  
を巧妙に改作して、国家における最高の地位は「知的な能力」にこそ与  
えられるべきだ、というみずからのメッセージを提示したのだった。さ  
らにのちにも、プラトンは、やはり同じ手法に訴えて、「正義」をみずか  
らの理想国では勇気の上位に据え、テイルタイオスに、そのような国制  
の精神に合致するように中身をしつかり書き換えるように、と命じてい  
る。

プラトンは、当時のスパルタの極端さをかなり酷評したものの、テ  
イルタイオスにはそれほどの酷評を加えなかった。前四世紀のスパルタは、  
まことに過酷で、驚くほどに偏狭で、ひたすら軍国主義的な力に溢れて  
いたが、テイルタイオスの詩は、そうしたスパルタにあつて「マグナカ  
ルタ（大憲章）」の地位を守っていた。当然ながら、いかに熱烈なスパ  
ルタ崇拜者であつても、この国で、美的感情の痕跡を目にできるなどと考  
えもしなかった。クセノポンは、この点に関して沈黙を守り、プルタル  
コスは、これ（美的感情）の欠如を隠そうと懸命に努めて不首尾に終わつ  
たのだが、これらは、以上の真実を何よりも雄弁に物語っているのでは  
ないだろうか。そのような感情的欠落は、スパルタの美徳に数え入れら  
れるには及ばない。幸運なことに、古えの本当のスパルタ——要するに  
前七世紀の英雄的スパルタ——が、のちのスパルタほど精神的に狭量で  
なく、実際面でいつそう豊かで充実した生活を営んでいた点なら、断片  
的な証拠に基づいてそれなりに論証できるかもしれない。というのも  
テイルタイオスは、競技者にまさつて戦士の方をはるかに高く称えた  
——大いにまつとう——けれども、前七世紀と前六世紀（わけても、メ  
セニア戦争がからくも勝利に終わつてのち）のオリンピック競技の勝者リ  
ストに目をやると、そこには、スパルタ人の名が途方もなく記されてい  
て、スパルタが、戦争に最善を尽くしたのと同じく、平和の祭典にもや



はり最善を尽くしていた点がはっきりと理解されたからである。

さらに加えて、この時期のスパルタには、のちの時代に、真にスパルタ的な特徴とみなされた、きわめてピューリタンの辛口の、芸術忌避などいまだに姿を覗かせていなかった。さまざまの発掘を介して、スパルタの市民がせつせと建築に勤しんだこと、そして、東方のギリシア様式を模倣した芸術に親しんだこと等々も次第に明らかになった。後者なら、ティルタイオスの用いる哀歌様式がイオニア（＝東方ギリシア）から輸入された、という事実にも合致するのではないだろうか。これと同じ頃に、あの七弦琴を考案した偉大な音楽家のテルパンドロスが、レスボスからスパルタに招聘され、宗教的祭祀に向けて合唱団を指導し、みずからの考案した重要な新様式に合わせてスパルタの音楽を展開してもいた。もつと時代が下ると、スパルタは、テルパンドロスの様式に頑なに傾斜して、この変更は、たとえわずかにせよ、革命に等しい、とまで考えるにいたった。ここにみられる、実践の化石化は、しかしながら、前七世紀のスパルタが抱いて離さなかつた、美的な文化は、市民たちの性格を丸ごと造り上げる、という確信のいかに強かつたか、をありありと物語っているのではないだろうか。スパルタの芸術衝動は、もしも十分な展開を許されたなら、本来の力をどれほどに発揮するか——この点は、あながち想像できないわけでもない。

われわれが抱く、古えのスパルタ像を補足してくれるものとして、現存するアルクマンの合唱詩の長い断片は、大いに歓迎されてしかるべきかもしれない。アルクマンは、サルデイスに生まれたがスパルタに移住し、この地で、みずからの生涯を賭けた職は、芸術家を措いてない、と見定めた。ティルタイオスが用いたのは、徹底してホメロス言語であつたけれども、アルクマンの方は、ラコニアの方言を細やかにみずからの抒情詩に導き入れた。ドーリアの性格は、ティルタイオスの場合、ホメ

ロスのなしたりの仮面を透かしてちらほらと顔を覗かせるにすぎなかつたが、アルクマンの場合は、この種族の持ち前である鋭いユーモアと現実主義的な活力が、スパルタの少女合唱団に向けて書かれた賛歌にたつぷりと溢れ返っていた。妬みや野心をほとんど交えず優雅に舞う乙女たちに、その名を挙げて褒め称えながら語りかけた当人の詩文は、当時の音楽コンクールの熱い対抗意識をありありと浮かび上がらせていて、われわれは、競い合う精神が、スパルタの女性たちの間でも、男性連中に劣らぬ激しさで目にされたのをしっかりと確認できるにちがいない。スパルタの女性たちは、アルクマンの詩も告げるように、(アジア的理想に影響された)イオニアや(このイオニアを真似た)アテナイの女性たちに比べ、公私の両生活にわたる自由をはるかに謳歌していた。そのような点は、演説や習慣における多くの他のドーリア的特質と同じく、ギリシアへの征服的侵入の時代から生き残つた純然たる遺産にほかならない。こうした初期時代の活力と自由が、スパルタでは、いかなるギリシア国家にも勝つてはるかに長く感じ取られていたのである。

#### 訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な、G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であつた。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯も

あつて、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切つて『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、

双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあつて、「スパルタにみるポリス教育」のみを掲載することにした。

(本学文学部非常勤講師)

